



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

正しい教えを学び、

実行しましょう

法華経方便品に「仏口所生の子」という言葉があります。仏さまの口から生まれたる者、すなわち、仏さまの口から説かれた尊い教えによって生まれ変わった者、という意味です。どんな人間でも、たとえ殺人者でも尊い教えを信じ、心から懺悔することによって生まれ変わることができるのです。

後にお釈迦さまの弟子になるアングリマールという者がいました。アングリマール経という經典の中に登場します。インドのコーサラ国の首都・舎衛城に現れた殺人鬼です。アングリマールは人を殺しては、その指を切って首飾りを作り、首にかけていました。「アングリ」と



は「指」、「マール」は「首飾り」という意味です。

舍衛城の人達は、夜な夜な出没しては人を殺し、指を切っていく殺人鬼に震えあがっていました。コーサラ国の波斯匿王は軍隊を率いてアングリマールを退治しようとしませんが、アングリマールは神出鬼没でつかまりません。ある時、お釈迦さまが、人々が恐れおののいているという噂を聞かれ、「私が教化しよう」とアングリマールのところに行こうとされました。「お釈迦さまが殺されては大変だ」と周りの人々は止めたのですが、「いや、心配は無用だ」と言われ、出かけて行かれました。するとアングリマールが現れたのです。

すぐにアングリマールはお釈迦さまを殺そうと襲いかかるのですが、お釈迦さまの神通力によってその衣に触れることもできません。アングリマールは狂ったように追いかけるのですが、どうしてもお釈迦さまに追いつく



ことができません。ついに疲れ果て、追いかけることをやめました。そこでお釈迦さまは尊い教えを説かれ、アングリマールを教化されたのです。お釈迦さまの教化はアングリマールの仏性に染み込みました。アングリマールは深く懺悔をし、その場で仏弟子になることを願い出ました。

仏弟子となったアングリマールはほかの弟子と同じように托鉢に出かけます。しかし殺人鬼だった男に人々がいい顔をするわけがありません。食べ物を与えるわけがありません。それどころか石を投げたり、殴りかかってくる者もいました。そうした仕打ちに来る日も来る日も耐えながら、アングリマールは托鉢に出たのです。

ある日、アングリマールは路上で苦しむ一人の妊婦に出会いました。〴〵どうかしてあげたい〴〵という慈悲心からお釈迦さまのもとへすぐに帰って、「妊婦さんを助



けてあげたいのです。子どもを無事に産ませてあげたいのです。どうにかありませんでしようか」と懇願しました。そこで、お釈迦さまは「その妊婦さんに手を合わせて『ご婦人よ、私は生まれてよりこのかた、生き物の命を故意に奪ったことがない。この真実の言葉の力によりて、あなたとあなたのお腹の赤ちゃんに安穩あれかし』と言いなさい」と言われました。

インドには古来、真実の言葉には不思議な力が宿るという信仰があります。お釈迦さまは「その真実の言葉の力をその女性の前で發揮せよ」と言われたのです。しかし、アングリマールはお釈迦さまに「私は多くの人間を殺してきました。生まれよりこのかた、生き物の命を故意に奪ったことがない」とは言えません。それは真実の言葉ではありません」と言いました。それに対してお釈迦さまは「私の言う通りにしなさい」と言われまし



た。意を決してアングリマールが女性に向かって、言われた通り唱えると、その瞬間に赤ちゃんが生まれたのです。アングリマールは生まれ変わっていたのです。「仏口所生」となっていたのです。

これは、たとえ殺人鬼と言われるような人でもお釈迦さまの教えに深く帰依して慈悲心を持つことで、生まれ変わることができるという大変ありがたいお話です。

余談ですが、真実の言葉とは「誓いを立てること」です。そして、その誓いを実行する。誓いは実行されるとその言葉が特別な力を持ち、いろいろな願いをかなえることができるということです。

これはインドから日本にも伝わりました。皆さんもやっておられる「願掛け」です。具体的には「お百度参り」や「水垢離」、「茶断ち」などが挙げられます。



歴^{れき}史^し上^{じょう}、有^{ゆう}名^{めい}な^なの^のは春^{かすが}日^が局^{のつぼね}による「薬^{くすり}断^だち」です。三代^{だいしやうぐん}将^{しやうぐん}軍^{ぐん}・徳^{とく}川^{がわ}家^{いえ}光^{みつ}の乳^う母^ぼだ^だつ^つた^た方^{かた}です。春^{かすが}日^が局^{のつぼね}は家^{いえ}光^{みつ}が子^こど^ども^もの頃^{ころ}に天^{てん}然^{ねん}痘^{とう}にか^かつ^つた^た時^{とき}、そ^その^の病^{やま}が治^{なお}る^るよ^{よう}う^うに^にと「私^{わたくし}は生^{しょう}涯^{がい}、薬^{くすり}を絶^{ぜつ}対^{たい}に飲^のみ^みま^ませ^{せん}」と薬^{くすり}断^だちの誓^{ちか}い^いを^をし^しま^まし^した^た。す^する^ると家^{いえ}光^{みつ}の天^{てん}然^{ねん}痘^{とう}は治^{なお}り、将^{しやうぐん}軍^{ぐん}に^にな^なり^りま^まし^した^た。晩^{ばん}年^{ねん}、春^{かすが}日^が局^{のつぼね}が病^{びやう}氣^きに^にな^なつ^つた^た時^{とき}、周^{まわ}り^りが薬^{くすり}を^すす^すめ^めた^たの^ので^です^すが春^{かすが}日^が局^{のつぼね}はき^きつ^つぱ^ぱり^りと断^{ことわ}り^りま^まし^した^た。一^い生^{しょう}涯^{がい}薬^{くすり}を断^{ことわ}つ^つた^たの^ので^です^す。「も^もし^し私^{わたくし}がこ^こで薬^{くすり}を飲^のん^んで^でし^しま^まう^うと家^{いえ}光^{みつ}さ^さま^まを^を守^{しゆ}護^ごし^して^てい^いる^る力^{ちから}が^が消^きえ^えて^てし^しま^まう^う」と^とい^いう^う命^{いのち}懸^けけ^けの^の思^{おも}い^いが^があ^あつ^つた^たの^ので^です^す。

ア^アン^ング^グリ^リマ^マー^ーラ^ラの^の話^{はな}に^にも^もど^どり^りま^ます^す。も^もと^とも^もと^とア^アン^ング^グリ^リマ^マー^ーラ^ラはマ^マニ^ニー^ー・ヴ^ヴア^アド^ドー^ーラ^ラと^とい^いう^うバ^バラ^ラモ^モン^ンの^の先^{せん}生^{せい}の^の五^ご百^{ひゃく}人^{にん}い^いた^た弟^{でし}子^{ひとり}の^の一^{ひと}人^りで^でし^した^た。非^ひ常^{じょう}に^に智^ち慧^えが^が優^{すぐ}れ^れ、容^{よう}姿^{したん}端^{たん}麗^{れい}で^であ^あつ^つた^たと^とい^いい^いま^ます^す。



先生が留守の時、先生の奥さんがアングリマールを誘惑しました。当時、アングリマールはアヒンサという名前でした。アヒンサが断ると、奥さんは怒って、先生が帰ってきた時に自分で衣を破り、暴行を受けたように装い、「アヒンサに乱暴された」と言いました。先生は激怒し、「未来永劫、地獄に落ちるような罪を犯させてやれ」と、アヒンサに「お前も修行がだいぶ進んできた。これからは特別な修行をせよ。明日から通りで出会った人を順に殺して、その指を一本切り取って、首飾りとせよ。千人の指が集まったらお前の修行は完成する」という大嘘を教えました。悩んだ末に、もともと真面目で先生を慕っていたアヒンサは「わかりました」と言って、その間違った修行を行い、アングリマールとなったのです。



最近、オウム真理教の死刑囚に刑が執行されたということが報道されていました。あの人達も非常に真面目だったそうです。真面目に人生を考え、真面目に修行をしたいと思っていたのですが、間違った先生に出会い、あのような形になってしまったのです。

新実智光死刑囚の坂本弁護士一家殺害の動機についての次の供述は、まるで師匠にだまされたアヒンサのようです。

「坂本氏は、教団が進めているすべての人びとをニルヴァーナに導くための障害となり、大多数の最大幸福を規制するので、やむなく『一殺多生、一死多生』で、坂本氏の犠牲で多くの人びとが救われるのならいたし方ないのです。しかし、死んだ一家三人は、麻原と縁ができたことにより救済されたのです」

彼らに殺された人達は本当に気の毒ですが、彼らもま



た犠^ぎ牲^{せい}者^{しゃ}であつたように思^{おも}います。

アングリマ^{はな}ラーの話^{はなし}は遠^{とお}い昔^{むかし}の話^{はなし}ではなく、現^{げん}代^{だい}にも通^{つう}ずる話^{はなし}です。

正^{ただ}しい師^し匠^{しょう}、正^{ただ}しい教^{おし}えに出^で会^あうことがいかに大^{だい}事^じか、つ^つくづ^くく考^{かん}えさせられます。

如^に来^よ来^ら寿^い量^じ品^{りょう}の中^{なか}に次^{つぎ}のよう^なな一^せ節^つが^あり^ます。「諸^{もろ}の^も有^あゆる功^く徳^{とく}を修^{しゆ}し、柔^に和^{ゆう}質^わ直^しなる者^{もの}は、則^{すな}ち皆^{みな}我^{われ}が身^み、此^こにあつて法^{ほう}を説^とくと見^みる」

これを実^{じつ}践^{せん}したある男^{おとこ}の話^{はなし}です。

その男^{おとこ}はお釈^{しゃ}迦^かさまの高^{こう}名^{めい}な噂^{うわさ}を聞^きき、ぜ^ひお目^めにか^かりた^いいと、旅^{たび}に出^でま^した。男^{おとこ}はま^だ一^い度^ども村^{むら}から出^でた^{こと}がな^いので道^{みち}に詳^{くわ}しい者^{もの}達^{たち}につ^いて出^でかけ^ますが、出^でかけ^てす^ぐに嵐^{あらし}に遭^あひ、皆^{みな}とはぐ^れてしま^いま^した。



幸さいわいいに羊飼ひつじかいの家いえに泊とまって、厚遇こうぐうを得えました。明あくる日ひ、はぐれた人達ひとたちに追おいつこうと、すぐに出でかけようとなりました。すると、羊飼ひつじかいが困こまり果はてていました。「どうしたのですか？」と聞きくと、嵐あらしで羊ひつじが全部ぜんぶ逃にげてしまつたといふことでした。「それは大変たいへんだ」と、男おとこは羊飼ひつじかいを手伝てつだい、三日さんかかけて羊ひつじを全部ぜんぶ捕つかまえました。「これで大丈夫だいじょうぶ」と仲間なかまの後あとを追おいかけに行いき、途中とちゅう、喉のどが渴かわいて農家のうかの女性じよせいに水みずをもらいました。

その女性じよせいは夫おつとに先立さきだたれ、幼おんない子こを抱かかえて、畑はたけの刈かり取とりができなくて困こまっていました。男おとこは「それは大変たいへん」と、三週しゅうかん間かんそここまに留とどまって収穫しゅうかくを手伝てつだいました。

その人ひとのもとを去さり、もうあと少すこしでお釈迦しゃかさまにお会あいできるといふところで、今度こんどはたまたま通とおりかかつた川かわで老夫婦らうふうふが川かわに流ながされているのを発見はっけんしました。すぐとに飛とび込こんでその夫婦ふうふを助たすけました。衰弱すいじやくしていた老ろう



夫婦をしばらく看病して、時が経ちました。それからまた旅に出るのですが、あと少しというところで何かが起きて、お釈迦さまと出会えぬままでした。

その後も各地を転々と旅を続けていたのですが、なんとお釈迦さまに会えぬまま、二十年が過ぎていました。

その頃「お釈迦さまが涅槃に入られるそうだ」という噂が耳に入りました。その涅槃の地・クシナガラに、ひと目でも、お釈迦さまにお会いしたいと一目散に向かいました。ところがまたもや、あと一息というところで、今度は道の真ん中に一頭の怪我をした鹿が倒れているのを目にしました。あたりには誰もいません。そこで自分の持っている水と食料を鹿の口元に置いて、立ち去ろうとしました。しかし、気が咎めて引き返し、一晩鹿を看病しました。夜が明けると鹿も少し元気になってきたので、再び出発しようとしたところ、「お釈迦さまが涅槃



に入られた」という知らせを聞きました。男は、「ああ、お釈迦さまに会うことができなかった」と地に伏して泣き崩れました。すると、背後から声が聞こえてきたのです。「もう私を探すことはない」と。

男が驚いて振り返ると、さっき助けた鹿がお釈迦さまの姿になってまばゆい光明を放っていました。そして、「もしそなたが昨晚、私をここに残して立ち去っていたら、きっと私には会えなかったであろう。そなたのこれまでの行いとともに、私は常にそなたと一緒にいた。これからも私はそなたとともにいるであろう」と言われました。その男は、今度は感涙におせび泣いてひれ伏したという話です。

鹿ばかりでなく、途中で出会った羊飼、農家の女性、川に流された老夫婦、皆お釈迦さまだったのです。いたるところで男はお釈迦さまに出会っていたのです。目の



前まえで困こまっている人ひとに手てを差さし伸のべようとした時とき、その慈じ悲ひ心しんによって男おとこはもうお釈しゃ迦かさまとともにあつたのです。お釈しゃ迦かさまと出で会あわつていたのです。これは寓ぐう話わですが、示し唆さに富とんだお話はなしです。

最後さいごは現げん実じつの話はなしです。ある新聞しんぶんのコラムにあつた記事きじです。そのコラムを書かいている女性じよせい編へん集しゆ者しやのお友とも達だちが鹿か児こ島しまに住すんでいて、もつとやり甲が斐いのある仕し事ごとがしたいぐと一念いちねん発はつ起きして、就しゆ職しやくしてから十年ねんたつて転てん職しやくを決けつ意いしました。鹿か児こ島しまから出でて、リクルートスーツに身みを包つつんで各かく地ちで就しゆ職しやく活かつ動どうをしました。

東京とうきやうでのことことです。ある日ひ、面めん接せつの約やく束そくを取とつて、その時間じかんに遅おくれないように、彼かの女じよは急いそいでいました。するどと道みち中ちゆう、熱ねつ中ちゆう症しやうになり路ろ上じやうで倒たおれている男おとこの人ひとがいました。『大だい丈じやう夫ぶですか』と声こゑをかけ、一いつ生しやう懸けん命めい介かい抱ほうして、



救急車（きゅうきゅうしゃ）を呼び、一緒に病院（びょういん）まで行ったそうです。その男（おとこ）の人が言ったのです。

「あなたはその恰好（かつこう）を見ると、今（いま）、就職活動（しゅうしょくかつどう）をしているのかね」

「そうなんです。実は面接（めんせつ）に行く予定（よてい）だったのですが、もう間に合（あ）いません。でもいいんです。あなたを助（たす）ける方が大事（だいじ）だと思ったんです」

「そうかそうか。すまなかったな。もしかしたらうちに来（こ）ないかね。私（わたし）、社長（しゃちょう）なんだよ」

と、名刺（めいし）をくれました。その名刺（めいし）を見てびっくり。その日（ひ）に面接（めんせつ）に行く予定（よてい）だった会社（かいしゃ）の社長（しゃちょう）さんでした。その後（ご）、会社（かいしゃ）に行くとその時（とき）の社長（しゃちょう）さんが「はい、採用（さいよう）」ということで、その女性（じょせい）は今（いま）、一生懸命（いっしょうけんめい）、楽しくその会社（かいしゃ）で働（はたら）いているということです。

慈悲心（じひしん）というのは本当（ほんとう）に大切な（たいせつ）ものです。

